

はじめに

名古屋市南区にある見晴台遺跡の市民参加の発掘調査が、**2018年度**に中止され、それ以降おこなわれていない。そのことについて取材した新聞記事⁽¹⁾のあることを、最近知った。

記事は、全部で**10段落**（①～⑩）からなり、このうち**9段落**（①～⑨）が本文で、段落⑩が独立した事項説明となっている。段落①に本文のリード機能があり、ここで問題が提起される。段落②～④で取材時直近の発掘調査事情を記し、これを補足するようにして、続く段落⑤・⑥で見晴台遺跡の調査史を概観する。そして、段落⑦～⑨で、段落②～④後の事情を書く。総じて、段落①が「起」、段落②～⑥が「承」、段落⑦・⑧が「転」、段落⑨が「結」、となるだろうか。順を追って見てゆきたい。なお、以下に資料館とあるのはすべて名古屋市見晴台考古資料館を指す。

1. 「自主的に」の不明

段落①末尾の「なぜなのか」は、直前の「今年度、初めて自主的に調査が中止になった」ことへの問いである。ここでちょっとつまずく。「自主的に」とはどういうことなのか。だれの「自主的に」なのか、すぐにわからない。「50年以上にわたって市民参加で発掘調査が続けられ」てきたことに触れられたあとであり、「参加」の「市民」の「自主的に」のような印象を受けるが、論理的につながらない。「自主的に」の主語は、この語の周辺に見られないのである。疑問を保留して先を急ごう。

段落②・③で、**55次（2015年度）、56次（2016年度）、57次（2017年度）**の発掘調査の目的、成果を書きつける。これは、のちの段落⑨に見られる「「考古学にならない発掘は遺跡を破壊するだけになってしまう」「成果を十分に整理せず、課題をみつけずに発掘を続けるのは難しい」という指摘に対応している。すなわち、**55～57次**の発掘調査では課題（段落②）、成果（段落③）ともにあったが、**58次以降**課題が不在となり、この不在は成果にもおよぶことが避けられず、よって中止にいたることの黙示となっている。

そして段落④は、「集落の中に墓があったのか、謎は深まる」として、**55～57次**発掘調査後の課題を示唆する。これを受けたと思われる「「掘れば掘るほどわからなくなる遺跡」と、市民参加の発掘調査史を追った段落⑤・⑥への橋渡しであろうところの「「市民が本物に関われるのはここしかない」」が続くが、二つの文章は論理的に断絶していて、思考に障る。

なお、段落⑤の「公園整備が進んでいた」は、「公園化計画があった」と書くのが実情に合っている。「郷土史家など市民ら」も同然で、「考古学研究者など市民ら」である。さらに、段落⑥で「79年に資料館が開館すると、資料館が市民から参加者を募って調査するようになった」という文章に接するとき、資料館開館以前はだれが参加者を募っていたかが語られていないことに気づくが、自然に人が集まってきていたわけではない。発掘調査

は教育委員会（一部は計画局）の予算でおこなわれ、一貫して行政の事業であった。ただ、行政から委嘱された考古学研究者が団長となって調査団を組織し参加者を募るか、資料館が直営で募集するかという方法の違いがあったにすぎない。「50年以上にわたって市民参加で発掘調査が続けられ」「長年、市民の手によって発掘調査がされてきた」「市民らが中心となって調査を始めた」の言葉にまどわされないようにしたい。

2. 「自主的に」の正体

さて、接続詞の「だが」によって段落⑦が逆接され、話題が転じる。2018年度の発掘調査の中止は、「50年以上にわたる膨大な過去の調査結果が十分に整理できていないため」だと言う。このくだりは、段落⑨で似た文言がでてくるため、そこであわせて検討することにして先を見ると、中止は「資料館として初めての判断だった」という一文にいたる。ここで、冒頭の「自主的に」の主語がようやく判明する。資料館が「初めて自主的に調査」を中止にしたのであった。

それにしても、行政の仕事に自主的かどうかを言うことができるのだろうか。たとえば、自然や人為の災害のときであっても行政は、困難な条件のもと、状況に応じて職務を遂行する。好むと好まざるとにかかわらず、自主的であるなしを超えてあるのが行政である。にもかかわらず、自主的であることが言挙げされるのはなぜか。好むと好まざるとにかかわって、つまり何か好き嫌いがあったのだろうか。そこに、段落⑧の人員問題があったとしても、明記されているようにそれは「背景」であり、前景の事情ではない。こうした行政の予算上の、原課・原局・財政当局間の内部問題が話題に取り上げられるのであれば、管理運営上の諸問題も等しく言及されなければならないだろう。

なお、「参加者に目が行き届かず、的確な記録ができない懸念も出てきた」のくだりの「出てきた」というのは誤りで、「懸念」は以前からよく言われてきたことである。この「懸念」が、市民参加の発掘調査を否定する際に使われる常套の口実に過ぎないのは、市民参加でない発掘調査を参照すれば明白となる。発掘調査は労働集約的におこなわれ、調査面積、調査期間、調査費用等に応じて、投下する労働量が見積もられる。それに基づき、調査員、調査補助員、作業員など階層化された多数の人員が動員されるが、この場合でも「目が行き届かず、的確な記録ができない懸念」は常につきまとう。記録どころか、発掘現場の安全管理が行き届かず、複数の作業員の死傷事故が起きたことは記憶に新しい⁽²⁾。だからと言って、この「懸念」を理由にして、発掘調査を中止することはない。体制を整えるか、「目が行き届き、的確な記録ができ」たことにして済ませてゆく。このように、市民参加の発掘調査だけが「目が行き届かず、的確な記録ができない懸念」を理由に中止される筋合いはないのである。

学芸員に即して付言すれば、市民参加の発掘調査で「目が行き届か」ないのは社会教育職員としての専門性、その理論と実践の問題であり、「的確な記録ができない」のは考古学研究者としての専門性、その理論と実践の問題として、整理して考える必要があるだろう。学芸員は、一個で二重の専門性を担っているのだから。

閑話休題。「自主的に」という言葉を用いなければ、表現できないような考え方や感じ方を生じさせる事情が、何かあったのだろうか。疑問をかかえながら読み進むと、その回答

にでくわす。「市民が守り育ててきただけにやめられなかった」と言うのである。「市民が守り育ててきただけに」すなわち「市民が守り育ててきた」からやめられなかったが、今回、「自主的に」中止した、ということだったのだ。

やめた理由は、先に触れた「「考古学にならない発掘は遺跡を破壊するだけになってしまふ」「成果を十分に整理せず、課題を見つけないままに発掘を続けるのは難しい」である。「考古学にならない発掘」の意味は、「成果を十分に整理せず、課題を見つけないまま」の発掘調査と理解してよい。

では、「成果を十分に整理」してこなかったのはだれか。資料館、教育委員会であろう。発掘調査において指導的役割を果たすのは学芸員である。その指導いかんによって、成果は十分に整理できたりできなかつたり、課題が見つけれられたり見つけられなかつたりする。こうした学芸員の役割を等閑に付して、「「考古学にならない発掘は遺跡を破壊するだけになってしまう」「成果を十分に整理せず、課題を見つけないままに発掘を続けるのは難しい」と他人事のように言うのは、無責任な職務怠慢の表明以外のなにものでもない。責任を果たすために中止したと言うのであれば、それは詭弁である。

3. 「過渡期」とは何か？

記事は、「次に向かっていくために一度見直す必要がある。市民発掘はいま過渡期にある」をもって、その結語とする。短い記事に、「見直す」の語が語尾違いで2回登場した。1度目は「市の事業見直し」である。行政で用いられるとき「見直し」は、マイナス方向の調子を呈することが多いが、ここでも人員削減、発掘調査中止と、ともにマイナス志向であった。

そして「過渡期」が唐突に登場する。記事のタイトルに採用されているためキーワードのように見受けられるが、この語の定義はない。市民参加の発掘調査が中止された状態を「過渡期」と呼ぶならば、中止後が指し示されてしかるべきである。フォーワードプランのないまま中止された状態を、過渡期とは呼ばない。終末期である。それを「過渡期」と揚言するのは、欺瞞である。

かえりみると、「過渡期」という言葉ではないが、見晴台遺跡の市民参加の発掘調査に「曲がり角⁽³⁾」が言われることがあった。1983年8月、22次発掘調査の最中に、主担当の資料館職員が交通事故で急逝したときである。また、ニュースにはならなかったが、9次発掘調査終了後の1971年11月、調査団長が急逝した際も見晴台遺跡発掘調査のゆくえが心配された。このときは、考古学研究者のあいだで活発な議論がおこなわれ、教育委員会も新しい団長を委嘱して、翌1972年に10次発掘調査が実施された。これらが、不意におとずれた変化をいかに乗り越えてゆくかだったのに比べると、今回の「過渡期」は行政の作品であることがわかる。再度問うが、「過渡期」とはいったい何なのか。

ここでもう一度、「自主的に」に触れておこう。「自主的に」とは中止にかかる形容であった。「自主的に調査が中止になった」のは2018年度が「初めて」ではない。1969年度の8次と1971年度の9次のあいだ、1970年度は発掘調査がなかった。まだ資料館はなく、教育委員会が中止を決定している。そして、1971年夏にマスタープランが市長によって発表されてゆく。これは、現在の遺跡公園と資料館のもとになる計画であり、マイナス方向ではな

い検討がその前年の1970年をピークにしておこなわれていたことがうかがえるのである。「自主的に」と言い「次に向かっていくために」とも言って、なにひとつ展望を示さず発掘調査を中止し続ける今日。中止してマスタープランとともに発掘調査を再開した往時。どちらが建設的で未来的な行政であろうか。

4. 「課題を見つけないまま」とは何か？

さて、「課題を見つけないままに発掘を続けるのは難しい」について、もうすこし考えておきたい。記事は、「集落の中に墓があったのか、謎は深まる」と書いて課題を示唆していた。もちろん、課題がこれで十分だとは思わない。記事が言うように、課題は見つけるものであるならば、見つける努力を必須とする。見つける努力とは、調査研究のことである。「見つけないまま」とは「調査研究しないまま」の意に等しい。調査研究しても課題が見つからない場合はあるが、それを「見つけない」とは言わない。そしてやはり、だれが「見つけない」のか、調査研究しないのかという問いが生まれる。課題も調査研究も、向こうから歩いてやっては来ない。そのうえで、調査研究の程度に応じて見つけられていた課題が、「集落の中に墓があったのか、謎は深まる」であった。

それならば、「課題を見つけないままに発掘を続けるのは難しい」というハードルは、多少なりとも低くなって、市民参加の発掘調査中止の理由も減る。課題が見つけれられているにもかかわらず、中止以外の方法が考えられるであろうに、発掘調査を中止した。すなわち、中止ありきだったかのようなのである。

それとも、参加者が「課題を見つけないまま」だから、「発掘を続けるのは難しい」と言いたいのだろうか。しかし、参加者は、リピーターもいるが原則的に単年度主義ゆえの一回性であり、継続性を保証するのは資料館、教育委員会である。具体的には、学芸員のおこなう調査研究が担うところとなる。そして、資料館は研究所ではなく、社会教育・生涯学習の機関であるから、参加者や利用者が課題を見つけてゆけるための機会を、継続的に設けてゆくことも求められる。その第一の条件整備として、市民参加の発掘調査、資料館、遺跡公園（所管の局は違うが）は存在してきた。

開館当初には、調査後も参加者と資料館職員との勉強会がおこなわれて、その成果を資料館の展示として企画実施していた。博物館学の理論に裏づけられた「友の会」も実践されて、資料館と利用者との有機的かつ持続可能なコミュニケーションの条件を整えていた。これらをして新たな課題を生み、育み、次の発掘調査へとつなげていこうとしていたのである。そうした日常的な積み重ねを怠ったあげくが発掘調査中止だとしたら、これほど恥ずかしいことはない。「50年以上にわたる膨大な過去の調査結果が十分に整理できていない」のであれば、それも同断である。

おわりに

記事を読み終え想像するのは——「「考古学にならない発掘」「遺跡を破壊するだけ」の発掘調査、「成果を十分に整理せず、課題を見つけないまま」の発掘調査、そういう可能性をはらむ発掘調査を「市民が守り育ててきた」から、資料館はそれを「自主的に」中

止した。中止したから、こののち成果は十分に整理され、課題は見つけられたことにして、市民参加のない、職員・業者による発掘調査がおこなわれるだろう。資料館は市民を遠隔化して、かつて市民参加の発掘調査のあったことを「記録」化、「記憶」化するぐらいのことはあるかもしれない——といったあたりであろうか。

なお、この記事には、社会教育・生涯学習の視点がまったくなかった。話し手の話題、意識になかったからであろう。ないものを記者が書けるはずもない。しかし、資料館は社会教育施設であり、学芸員は社会教育職員である。この点に注意した検討は、あらためておこないたい。

私事にわたるが、わたしにとって初めての発掘調査体験となった8次調査から、この8月でちょうど50年が過ぎた。この機にことよせての所感は、以上である。願わくは、市民参加の発掘調査は早く再開されて、人びとの幸せに見晴台体験の寄与するところ多ならんことを。

注

- (1) 中野龍三「朝日新聞デジタル：市民発掘 過渡期迎え中止 - 愛知 - 地域」
<http://www.asahi.com/area/aichi/articles/MTW20181120241680009.html>（2019年8月1日閲覧）。
- (2) 「遺跡発掘現場で土砂崩れ、作業員1人が死亡 2人軽傷：朝日新聞デジタル」
<https://www.asahi.com/articles/ASM755RPJM75TLVB00K.html>（2019年7月5日閲覧）。
- (3) 「レポート'83／ロマン発掘曲がり角／見晴台遺跡／市民参加、環境厳しく／作業縮小案やリーダー急死」1983年8月15日、日本経済新聞。（複写：岡本俊朗追悼集刊行会編『岡本俊朗遺稿追悼集 見晴台のおっちゃん奮闘記——日本考古学の変革と実践的精神——』、岡本俊朗追悼集刊行会、1985年8月2日、566頁。）

参考文献

- (岡本俊朗編著)『一第20次記念—見晴台遺跡発掘調査のあゆみ』、名古屋市見晴台考古資料館、1981年7月20日。
- 岡本俊朗追悼集刊行会編『岡本俊朗遺稿追悼集 見晴台のおっちゃん奮闘記——日本考古学の変革と実践的精神——』、岡本俊朗追悼集刊行会、1985年8月2日。

(2019年8月19日)